

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：33302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520109

研究課題名(和文) 中世における白山信仰日吉信仰全国伝播の研究

研究課題名(英文) The Study of the Spread of Faith in Hie and Hakusan at the Medieval Japan

研究代表者

平泉 隆房 (HIRAIZUMI, Takafusa)

金沢工業大学・基礎教育部・教授

研究者番号：20148357

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：白山信仰と日吉(山王)信仰が、中世にどのように全国に広まっていったかを、現在の白山神社・日吉神社の分布図を作成し、それを参照しつつ検証した。中世前期までに成立した日吉社領が近江や北陸道を中心に全国に散在してみられ、その付近には現在でも多くの日吉神社が鎮座していることを確認した。白山神人と日吉神人、言い換えれば両信仰が対立することなく、協調して信仰圏の拡大につとめていたことも明らかとなった。

なお、これらの勢力が、衰退した延喜式内社に入り込み、それぞれの地域の拠点としていた事例を多く検出することができた。あわせて、古代中世について、白山信仰に関するこれまでの研究史をまとめた。

研究成果の概要(英文)： I inspected how to spread to the whole country the faith-Hie and the faith-Hakusan at the medieval Japan, reference in making the present distribution maps.

From the maps, I verified that the Hie-jinja domain which beformed till the early Medieval dotted from the heart Hokurikudo to the whole country. I verified on same dotted places, there are many Hie-jinja and Hakusan-jinja at present. These throw light on that the relation of Hie-jinja and Hakusan-jinja, the Hie-faith and the Hakusan-faith are not opposing but cooperating to spread their power whole Japan.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：白山信仰 日吉信仰 白山神社 日吉神社 式内社 白山信仰研究史 伊勢神道思想 心神

### 1. 研究開始当初の背景

申請者(平泉)はこれまで伊勢神宮史や伊勢神道を中心とする中世神道思想の成立過程などを検証してきた。そのなかで、山岳信仰や神道思想がどのように庶民の間に広まり浸透していくのかを明らかにすることができれば、この分野の研究に大きく寄与すると考えるに至った。神道学者や神職の議論ももちろん重要ではあるが、信仰が広まり伝播していくからには、それを伝えた人々や集団、それらの人々の拠点となった社寺があったことが想定され、その経路についても種々のものが考えられる。信仰の分布に関しては、これまでもしばしば議論されてきているが、信仰の伝播経路については意外なほど等閑視されてきたように思われる。そこで、申請者(平泉)は信仰が具体的にどのように伝播し、どういった場所を拠点としているのかについて検証したいと考えるに至った。

### 2. 研究の目的

(1) 白山信仰が代表的な山岳信仰の一つであることに異論はない。現在、約 2000 社の白山神社(白山比咩神社、白山社)が全国に鎮座している。その分布状況には傾向があり、白山を望める北陸から東海地方に多いのはもちろんのことであるが、意外にも、日本海をさらに北上した新潟県・山形県・秋田県にも多く、また東海地方から東にのびて、関東地方からさらには東北各地にも実に多く鎮座している。一方、目を西に転ずれば、瀬戸内海を経由するのであろうか、瀬戸内沿岸部分、さらに四国また九州北部にも多く存在している。しかも、いずれの場合も、白山神社が多い県は、日吉神社(山王神社、日吉社)も多いのである。歴史的には、平安後期から末期にかけての時期に、白山麓にある白山信仰の拠点社寺の多くが比叡山延暦寺の末寺(別院)になっていることが知られており、安元事件(白山事件)の際に、強訴の目的で上洛しようとした加賀白山佐羅宮の神輿が、日吉社(現、日吉大社)に一時安置されたことなどは周知のことで、白山神人と日吉神人との協調がそこからはうかがわれるのである。

(2) そこで、このような白山神人と日吉神人の協調が実際どのようなものであったかを探りつつ、両信仰が伝播し広がっていった足跡を検証することにした。江戸期の、加賀藩主前田家による積極的な白山神勧請や、天海僧正による日吉堂の建立は知られたところであり、曹洞宗のなかに強い白山信仰がみられることもこれまでに指摘があるところだが、本研究ではこのような近世江戸期以降の事例は全て除外し、中世前期(鎌倉・南北朝)以前に遡って検証することとした。

### 3. 研究の方法

(1) 神社本庁が平成初年に数年間をかけて調査作製した『全国神社祭祀祭礼総合調査、

平成「祭」データ』のなかから、それに記載された全国約 2000 社の白山神社と、やはり約 2000 社ある日吉神社(山王神社)の鎮座地地名(小字名、集落名)を全て抽出し、その地名を国土地理院発行の 20 万分の一地勢図上で拾った。同地勢図は全ての地名を網羅しているわけではもちろんなく、都市の市街地を中心に記載スペースがないなどの理由で省略されていることが多く、その不備を補うため、同院発行の 5 万分の一地形図、同 2 万 5 千分の一地形図上でさらに拾った。さらに明治期に一部地域(軍事拠点を中心とする)のみ作製された 2 万分の一地形図や、昭和戦前期の陸軍陸地測量部作製の地形図も、必要な範囲で購入活用したが、限られた地域にとどまっている。神社の位置を確認する作業は、同院発行の地勢図・地形図を直接用いるのではなく、フリーソフト・カシミール 3D を用いて実施した。その結果、約 8 割の神社を、地図上で確認することができた。なお、神社本庁の調査データには、ほぼ 95 パーセントの神社に、鎮座地の緯度経度の位置情報が記載されており、それらを活用して、それをカシミール 3D 上に置いた地図も、あわせて作成した。神社本庁への報告が正確になされている場合、ほぼ地勢図・地形図上の神社のマークと重なった。研究の過程で、神社本庁資料の位置情報をカシミール 3D 上に書き出すプログラムを開発できたため、これらの基礎作業は比較的短時間(20 分ほど)でできる状態になっている。

(2) 白山神社・日吉神社の鎮座地をマークした地図をもとに、そこに古代中世までの主要街道(駅路)や脇街道、さらに中世前期以前に成立した日吉社領や延暦寺領荘園を書き込んだ。『古代日本の交通路』(全 4 冊)などの交通史方面の諸研究をはじめ、遺跡調査報告書の成果を反映した文献(たとえば、古代交通研究会編『日本古代道路事典』など)も一通りあたった。ことには平凡社の地名辞書からは多くの知見を得た。さらに中世前期までの諸史料にあたって、荘園成立の過程で、白山神人や日吉神人の関連がうかがわれる史料を抽出することにつとめた。

### 4. 研究成果

(1) 以上の作業を通して、いくつかの見通しを得ることができた。中世前期までに成立したことが明らかな延暦寺領荘園また日吉社領の周辺には、現在も日吉神社が多く分布していることは、北陸道諸国はもとより、美濃国などでも明らかにいえることである。それらの日吉神社の創祀年代は多くが不明であるが、創建が中世に遡るものがあることは確実である。また、神社の創建といっても、白山神社や日吉神社を新たに創祀することはもちろんあるはずであるが、意外なことに、延喜式内社を名乗る白山神社また日吉神社がかなり存在していることを突きとめた。式内社である白山神社は、加賀一宮の白

山比咩神社1社のみであることは周知のことであるから、このことは、式内社の衰微に乗じて、白山勢力や日吉神人が、活動の拠点として式内社に目を付けて、そこに新たに入り込んできたものに相違ない。式内社が、主要街道の交差する交通の要衝や国府付近に多く存在することは既に知られたところであるから、そのような立地上の利点をも勘案して、進出してくるのである。中世のある時期から「白山社」や「山王さん」として親しまれ、明治に入ってから、本来の式内社名を名乗ったりする神社が確かに存在する。北陸道諸国だけをあげても、福井県三方郡三方町佐柿の日吉神社、同県坂井市三国の三国神社、石川県金沢市三池町の日吉神社、同市浅野本町の浅野神社、同県羽咋郡志賀町直海の瀬戸比古神社、新潟県糸魚川市の能生白山神社、同県五泉市大字橋田の中山神社、同県新潟市沼垂の白山神社がそれであり、全て式内社かその論社である。これらの神社群以外にも、中世にまで遡る資料を見いだせなかったものの、13社ほどの神社が、式内社やその論社である。これは延喜式内社の中世の変容ともいえるべきもので、北陸道以外でも美濃国などでは多く見受けられ、全国的に調査すべき興味深い課題である。なお、信仰の伝播に関して、北陸道諸国では海岸伝いの進出が考えられるほか、川を遡って日吉神社が進出している例も多い。むろん陸路も相応に利用して進出しているようで、北陸道を越中、越後と北上した勢力が、越後の国府直江津のあたりで、さらに北上するものと、反転して南に進み妙高山付近をさらに南下して信濃国に進む勢力があるように思われる。

(2) 北陸道諸国に関する研究成果は既に公表している。東海道・東山道諸国の調査は、ほぼ完了しているものの未公表である(平成26年末に活字化の予定、付図を多く含む)。そのなかでは、東山道、とりわけ現在の東北地方の有力寺院に「日吉堂」「白山堂」といった形で、白山神や日吉神を祀っている事例を紹介する予定である。申請者(平泉)は奥州平泉を実際に訪ね、中尊寺の北方守護の白山神社に参詣した。また『吾妻鏡』に明記されている、平泉東方守護の日吉社・白山社が日吉白山堂(社)として現存し、住職・志羅山浩順師(毛越寺総務部長)の案内で特別拝観した。現在は失われてしまったが、過去に「日吉堂」「白山堂」を祀っていた例も達谷窟をはじめ若干ではあるが確認できた。住職の案内で、かつての白山堂に安置されていた秘仏も拝観している。神事として白山信仰ゆかりのそれを現在も執行している寺院もある。なお、白山神社や日吉神社(山王神社)という名称でないため、一見すると無関係と思われるがちな神社のなかに、実は白山の神々、日吉の神々を祀っている神社がある。「菊理媛」「白山大神」を祭神としている(相殿神も含めて)神社は、その名称がどうあれ、白山信仰と何らかの関係にあることは考慮し

て良く、神社名の変更が、明治末年の神社合併策によるものなのか、別な理由によるものなのかはさらに検証しなければならないものの、検討の余地があることは明らかである。このような祭神別の分布図も、多種多様なものを作成し、現在も作成中である。今後、順次学術誌上に発表していく予定である。

(3) 白山神人と日吉神人との協調は、北陸道に関しては明らかにいえる。現に史料上に「日吉白山神人」の用語を見出すこともできる。『義経記』にみえるため室町期を遡ることはむづかしいが、白山の姫神と唐崎大明神の結婚談も見えて、当時の人々にとって両信仰(両神)は親しい間柄のものにとらえていたこともいえよう。日吉神社が多い県は白山神社も多く、北陸道では明言でき、東日本でもほぼこの傾向は認めて良い。ただし、八幡神社や熊野神社・神明神社・天神神社・稲荷神社・春日神社をはじめ、全国的に多く見られる神社がいくつもあり、単純に数値だけから白山神社の多い地方は日吉神社も多い、と決めつけているわけではない。具体的な史料にそって、たとえば加賀一宮の白山比咩神社から、現在の金沢市の発祥の地とされる大野(宮腰、金石とも)に鎮座する式内社大野湊神社に向けて、遅くとも中世前期までには「白山大道」と称する街道が通じており、この道と古代北陸道が交差するあたりにできたのが、現在の野々市市である。その野々市周辺に多くの日吉神社が鎮座していることは偶然の一致とは思われず、必ずや日吉神人と白山勢力との交渉があったことを類推させるものである。このように、史料的な裏づけを加味しつつ、逐次検証した。東日本(東海道・東山道諸国)の作業はほぼ完了し、順次、西日本について検討中である。

(4) 白山信仰に関する研究史をまとめた。公表したのは古代・中世の部分だけであるが、今後は近世・近代の部分も予定している。山岳宗教史研究叢書と民衆宗教史叢書に、それぞれ主要な研究論文が再録され、また貴重な研究史整理がなされている。申請者(平泉)は、白山信仰の解明に直接つながるとと思われる論点を中心として、白山信仰の成立と展開、『泰澄和尚伝記』の信憑性、白山曼荼羅、白山信仰の伝播等について取り上げ、これまでの研究史を荒削りながら概観し、論点整理を試みた。その結果、これまでの研究が、意外なほど意見交換をすることなく個別に行われており、重要な点で意見の大きな対立があるなど、課題が山積していることを指摘できた。白山信仰がもともとは一つであって、それが白山麓に広まっていくという見方がある一方で、加賀・越前・美濃・飛騨などそれぞれ白山の周辺地域で自然発生的に信仰が芽生えたもので、それぞれが本家であって、分家は初めから存在しなかったという説が、対立している。祭神についての研究は、ほとんど議論されたことがなく、現在でも無批判に白山の女神を菊理媛とみなす説がほとん

どであるが、白山比咩（姫）神に菊理媛をあてるのは室町期に入ってからで、それ以前は伊弉册尊であって、それを白山妙理菩薩とか妙理権現とも称していたことはほぼ確実であり、このような核心的な部分に既に誤解が存在している。加賀・越前・美濃それぞれの白山信仰の拠点を三馬場と称しているが、これら三者が白山の領有権をめぐる争ったという見方も広く流布しているが、室町中期以降のことで、ながく争ったという先入観だけで論ずることは危険な上、江戸期などの争論は、加賀前田家と越前松平家との確執とも考えられ、単純に争いの面だけを強調することには疑問も残る。越前の拠点・白山平泉寺の滅亡が一向一揆によるものであることは明らかだが、この場合の一向宗勢力との抗争は宗教的対立などとは無縁のもので、単なる権力闘争であることも明らかだが、なぜが宗教対立と理解されて久しい。研究者間の交流や討論の場があれば、このような諸点のいくつかは解消するはずである。近世・近代の部分では、近世の美濃・石徹白の白山御師による白山神社の勧請や白山信仰の流布、曹洞宗内部に浸透していく白山信仰、六十六部納経所、白山牛王や起請文、白山狛犬さらに明治期の神仏分離の影響や問題点について報告する予定である。

(5) 白山信仰と日吉信仰、言い換えれば白山勢力と日吉勢力の協調という点、意外な感じも否めないが、実は伊勢信仰と八幡信仰が共に「正直」の思想を強調していたことを明らかにした。具体的には、伊勢神道という「正直」が、鎌倉前期には八幡信仰で強調されていた「正直」の影響を受けていること、石清水八幡宮などでの「正直」の強調は、平安期の『今昔物語』などに頻出する伝説としての「正直」の意味に近いことを指摘した。そして、このような「正直」の思想が、伊勢神道思想に取り入れられ、「清浄」思想と共に、伊勢神道の主要な思潮となっていくことを考えた。いわゆる「三社の託宣」は、伊勢・石清水・春日であるが、いずれも「正直」を基調としており、この託宣の流布こそは、神道の教えとして庶民に広まり、後世に大きな影響を及ぼして日本人の国民性の一部となっていくことを指摘した。

(6) 伊勢神道思想という点、「正直」と「清浄」がその中心とされて目が行きがちだが、実はその中心に「心神」(心の中に神が宿る)の思想があることを明らかにした。伊勢流被詞に「心神」の思想が見られること、その伊勢神宮における心神思想の成立が鎌倉初期に遡ること(伊勢神道の成立時期がその頃である証拠となる)そこに東大寺の教学との不思議な一致があること、その東大寺東南院で「三社の託宣」が作成されたとする所説のあること、などから、これからが密接に関連していることを指摘した。伊勢神宮祠官と東大寺との間に交流があることは、白山信仰と延暦寺との間に交渉があることを考える際

に参考となるに相違ない。白山修験者が、室町期には伊勢参宮をしつぱしつぱ行っており、そのためであろう、現に平泉寺白山神社に伊勢流被詞がもたらされ伝来しているのである。このような諸信仰の交渉交流は今後の大きな課題である。

(7) 白山神社と日吉神社の全国分布図は既に完成している。祭神別の分布図も、如何なる種類のものであれ、20分くらいで作成可能であり、既にかなりな種類のもので作成している。それによれば、白山信仰と一口に言っても、加賀・越前・美濃側にそれぞれ非常に多くの白山神社が鎮座しているものの、その傾向には顕著な相違が見られる。つまり、越前(福井県)に300社をこえる白山神社が存在しているものの、「菊理媛(姫)」を祭神とする白山神社はほとんどなく(約20社)、「伊弉冉尊」を祭神とするものが圧倒的に多いことを突きとめた。逆に、加賀(石川県)には「菊理媛(姫)」を祭神とする白山神社が多く(220社のほとんど全て)、美濃(岐阜県)では「伊弉冉尊」「伊弉諾尊」「菊理媛(姫)」の3神を祭神とするものが圧倒的に多いことも明らかとなった(500社ほどの白山神社の多くがそうである)。明治期の神社明細帳の信憑性には疑問点も多く、提出時の都合によって、安易に社名を変更し、祭神名を変更したものがかなり含まれていることが指摘されているものの、このような祭神の分布を加味した場合の明らかな相違は注目される。越前(福井県)の白山神社に菊理媛を祭神とするものが極端に少ないことは、創建当初からの実態を反映している可能性が高く、しかも明治期に入ってからの変更とは考えにくく、この点の解明にはさらに時間をかけたい。なお、東海地方から東北地方にかけての広い範囲に濃密に分布している白山神社の中には、祭神を単に「白山大神」とするものも少なく、そのことの意味も改めて問う必要がある。古代の北陸道・東海道・東山道(部分的には諸説も多い)を地勢図・地形図上に引いてみたところ、そのルートの近くに中世前期以前に鎮座したことの明らかな日吉神社もかなり存在し、そのことはまた、早くからの日吉勢力の進出を裏づける可能性もある。

(8) 今後の課題としては、西日本各地に広く分布している白山神社また日吉神社(山王神社)の勧請の経緯や信仰伝播の経路を明らかにする作業が残されている。福岡県久留米市近くにあった延暦寺領瀬高荘の周辺に、現在でも多くの日吉神社が鎮座していることは、北陸道諸国や美濃国の研究と照らし合わせても妥当なことである。それ以外にも、山陰地方をほぼ唯一の外として、西日本全域に多くの白山神社また日吉神社が存在しており、その勧請経路の解析は主たる研究テーマとなり、資史料を丹念に掘り起こしてみたい。山陰地方だけが例外的に白山神社も日吉神社も少ないようであるが、鳥取県は祭神名をそのまま神社名とする神社が極めて少ない、

という情報を得ており、このような点も国別の神社分布状況を考究する際のポイントとなる。祭神別の神社分布はこれまでほとんど検討されたことのないテーマで、申請者（平泉）はそのような分布図を全国的に極めて短時間で作成できるため、随時検証していく。

（9）かつての式内社に、白山勢力また日吉勢力が入り込んでいないかも網羅的に検証してみたい。それぞれの神社の、中近世における通称や俗称が手がかりとなり、『式内社調査報告』や平凡社の地名辞書を丹念にあたる予定である。このような神社の中世的変容はこれまで研究が立ち後れていた分野である。しかし寺院の場合、衰退したそこに他宗派の勢力が入り込んでくることは広く認められ、同様のことが式内社でも見られるに過ぎない。なお、石川県野々市市の中央部に日吉神社が集中して鎮座していることは前述したが、ここで注目すべきは、妙法院門跡領押野荘の中心に位置する押野に鎮座する高皇産霊神社である。野々市市から金沢市の押野・押越・若宮・横宮・野々市本町・八日市・横川・久安一帯の広大な地域の中心部に鎮座している同神社は、明治24年押野大火を経て現社名に落ち着いているものの、それ以前はながく押野山王社また山王神社の名で親しまれていたことを見逃してはならない。明らかに日吉信仰の中心的役割を同神社がながく担っていたことは確かである。このような事例を、広く東日本、西日本でも収集していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

#### 〔雑誌論文〕（計4件）

平泉 隆房 伊勢神道「心神」小考 『藝林』63巻1号 pp107~122 査読あり 2014年

平泉 隆房 中世前期における白山信仰日吉信仰全国伝播についての一考察(一) - 北陸道を中心として - (金沢工業大学日本学研究所) 『日本学研究』16 pp1~82 査読あり 2013年

平泉 隆房 白山信仰研究の現状と課題(一) - 古代中世を中心として (金沢工業大学日本学研究所) 『日本学研究』15 pp1~34 査読あり 2012年

平泉 隆房 前期伊勢神道の思想(金沢工業大学日本学研究所) 『日本学研究』14 pp1~82 査読あり 2011年

#### 〔学会発表〕（計1件）

平泉 隆房 伊勢神道の諸相 藝林会学術大会招待講演 皇學館大学 2013年

#### 〔図書〕（計 件）

#### 〔産業財産権〕 出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

#### 取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

#### 〔その他〕 ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

平泉 隆房 ( HIRAIZUMI Takafusa )  
金沢工業大学・基礎教育部・教授  
研究者番号：20148357

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：